

- 1 . 聖徒たちのためのこの奉仕については、いまさら、あなたがたに書き送る必要はないでしょう。
- 2 . 私はあなたがたの熱意を知り、それについて、あなたがたのことをマケドニアの人々に誇って、アカヤでは昨年準備が進められていると言ったのです。こうして、あなたがたの熱心は、多くの人を奮起させました。
- 3 . 私が兄弟たちを送ることにしたのは、このばあい、私たちがあなたがたについて誇ったことがむだにならず、私が言っていたとおりに準備していただくためです。
- 4 . そうでないと、もしマケドニアの人が私といっしょに行き、準備ができていないのを見たら、あなたがたはもちろんですが、私たちも、このことを確信していただけに、恥をかくことになるでしょう。
- 5 . そこで私は、兄弟たちに勧めて、先にそちらに行かせ、前に約束したあなたがたの贈り物を前もって用意していただくことが必要だと思いました。どうか、この献金を、惜しみながらするのではなく、好意に満ちた贈り物として用意しておいてください。
- 6 . 私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。
- 7 . ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してください。
- 8 . 神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。
- 9 . 「この人は散らして、貧しい人々に与えた。その義は永遠にとどまる。」と書いてあるとおりです。
- 10 . 蒔く人に種と食べるパンを備えてくださる方は、あなたがたにも蒔く種を備え、それをふやし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。
- 11 . あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。
- 12 . なぜなら、この奉仕のわざは、聖徒たちの必要を十分に満たすばかりでなく、神への多くの感謝を通して、満ちあふれるようになるからです。
- 13 . このわざを証拠として、彼らは、あなたがたがキリストの福音の告白に対して従順であり、彼らに、またすべての人々に惜しみなく与えていることを知って、神をあがめることでしょう。
- 14 . また彼らは、あなたがたのために祈るとき、あなたがたに与えられた絶大な神の恵みのゆえに、あなたがたを慕うようになるのです。
- 15 . ことばに表わせないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。

説教

飢饉や迫害の故に経済的に逼迫していたエルサレム教会への献金をアピールするべく、パウロは「マケドニアの諸教会」を良き模範として「知らせます」(コリント8:1)。

彼らは自分たちが窮乏のどん底にありながらもそれに負けることなく、打ち勝って、喜んでいました。その喜びは自分を満たすのみならず、自分から溢れて他の人をも満たすほどの喜びです。それで、その喜びを自分の中だけでしまっておくことができず、何かの形でそれを表したくてたまらず、彼らの喜びは「惜しみなく施す富となった」(8:2)でした。彼らは神の恵みを受けた嬉しさのあまり、その喜びを他の誰かと分かち合いたくて、それを「惜しみなく施す富」としてエルサレム教会に献金します。こうして、マケドニアの教会の兄弟姉妹は、人から強いられてではなく、「自ら進んで」、それぞれの「力に応じ」、否それどころか彼らの持てる「力以上に」献金をささげて、「聖徒たちを支える交

コイノニア
わり (koinwni,a)の恵みにあずかりたいと熱心に」パウロに願いました(3-4)。

このパウロの言う「聖徒たちを支える交わりの恵み」とは要するに「献金」のことを意味しますが、パウロにとってマケドニアの教会にとっても「献金」は「恵み」でした。自分が神から受けた恵みを喜んで神にささげ、隣人に分かち合う恵みです。それは「あふれる」恵みです。神からもらったものが、自分を満たすのみならず、その人から満ち溢れて他の人を満たしていく「恵み」です。そして、パウロは、マケドニアの教会の兄弟姉妹を満たした「恵み」が、コリント教会にもあるよう願います(7)。「信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、愛にも富んで」、「献金」以外の「すべてのことに」富んでいる彼らが、「献金」にも豊かに恵まれて献金するよう願います。そして、イエスさまは私たち罪人が恵み豊かに「富む者」となるために「貧しく」なられたとパウロは言います。すなわち、神の恵みに満ちあふれて「この恵みのわざにも富む」者となるよう(つまり、喜んで神に献金し、喜んで人に施す恵みあふれる者となるようにと)イエスさまは「富んでおられた」のに、「貧しくなられた」というのです(9)。

続く9章では献金についてのアピールがさらに続けてなされます。パウロはコリント教会にテトスと二人の兄弟を遣わします(8:16-22)。彼らはパウロに負けないほど熱心で、諸教会からも賞讃されました。彼らの熱心さに燃やされチャレンジを受けて、マケドニアの諸教会は奮起して、自分たちの「力以上に」献金をささげたほどでした。

そして、パウロはついでにコリント教会のことについてもマケドニアの教会に推薦しておいたのですが、実はそれについては大きな不安がありました。それで、パウロがマケドニアの教会員を連れてコリント教会を訪問する前に、彼らの実態がせっかくの前宣伝とは正反対だとばれてパウロが恥をかかないようこう勧めます。「そこで私は、兄弟たちに勧め、先にそちらに行かせ、前に約束したあなたがたの贈り物を前もって用意していただくことが必要だと思いました。どうか、この献金を、惜しみながらするのではなく、好意に満ちた贈り物として用意しておいてください。」(9:5)「惜しみながらするのではなく」と訳される mh. w`j pleonexi,an の直訳は「断じて貪欲(強欲)の様ではなく」です。「贈り物 euvlogi,an」とは元々「祝福、感謝、讃美」を意味し、ここでは神の恵みを受けた感謝のささげ物、献金を意味します。「好意に満ちた贈り物」と訳されるのもまた同じ言葉 euvlogi,an です。つまり、献金はいくまで神の恵みを受けた「感謝」をささげるものなのであって、「貪欲」から惜しみながらするものでは断じてありません。そう主張する根拠として、パウロは「少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります」と言います(6)。直訳は「ケチ臭く(儉約して、乏しく)蒔く者はケチ臭く(儉約して、乏しく)刈り取り、感謝(祝福、讃美)から蒔く者は感謝(祝福、讃美)して刈り取る」です。本当は献金したくないのに仕方なく献金するといった「貪欲」による「ケチ臭い」献金は、「ケチ臭い」収穫しか期待できないと言います。そして、反対に、心からの感謝の献金こそが神への讃美と祝福をもたらす、と言うのです。

それで、パウロは勧めます。「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」(7)「強えられる evx avna,gkhj」は「必要、避けられない」の意味です。「いやいやながら evk lu,phj」の直訳は「悲しみから、痛みから、嘆きながら」です。神に献金することは現実には自分の手元から金がなくなることを意味します。それで、「ああ、もったいない、惜しい、心痛い」と悲しみ、痛み、嘆きながら献金します。神の恵みを心から知っている者は神の恵みに感謝し喜んで献金しますが、神の恵みを知らない者にとっては献金は「悲しみ」です。「痛み」です。「嘆き」以外の何ものでもありません。神の恵みに感謝するどころか、もっと何か祝福が欲しいと願います。恵みが足りません。と言うよりは、恵みがありません。神の恵みを知りません。それで、神の前に立っても、人の前に立っても、もっとくれ、もっとくれと要求します。これを「貪欲」と言います。献金は「貪欲」あるいは強迫観念からするものではありません。むしろ、神から受けた恵みに感謝する喜ばしい「心」からささげるものです。そして、神は「喜んで与える」ささげ物を喜ばれるのです。

神への献金を惜しんで「貪欲」なコリント教会でしたが、それでも人一倍弱い彼らであっても平安に安心して献金で

きるよう、パウロは特別な解説を付け加えます。「神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。」(8)「あらゆる *pa/j*」という言葉在五回も連発しながら、パウロは、神が私たちをあらゆる祝福で溢れるほど満たして下さるのだから心配せず献金するよう勧めます。神はどんな時にも、あらゆる恵みを、溢れるほどに満たして下さいます。そうして、あらゆる良い働きをさせて下さいます。ですから、何も心配せず「貪欲」にも負けずに献金するよう勧めるのです。

私たちの一切の祝福の源は救い主キリストにあります。キリストがご自身の持てる一切を「散らして、貧しい人々に与え」ました(9)。この「イエス・キリストの恵み」(8:9)により、何も無い、無一物の罪人である私たちは神の「義」にあずかり、地獄の滅びを免れて天国に行くことができます。そして、私たちを喜びで満たし、満ちあふれさせて、心から喜んで神に献金し、人に施す者として下さるのです。

ここでもパウロは8章と同様に献金を恵みと理解します。「イエス・キリストの恵み」により神の「義」にあずかった私たちが心から喜んで感謝をささげるのが献金です。救いの恵みに感謝すればするほど、救いの恵みを喜べば喜ぶほど、より豊かに献金します。その献金はそのまゝ恵みを意味するのです。それで、パウロは献金を「義の実」と表現します(10)。それは、神から、無料で、タダで、値なしで「義」という絶大な恵みをいただいた喜びと感謝の「実」です。救いの恵みが結ぶ「実」です。「実」と訳される *ge,nhma* は、「生産物、製品、結果」を意味します。神の恵みを受けて救われた結果、その喜びが生み出す恵みの生産物こそが献金なのだ、と言うのです。

日毎の糧が与えられているのも恵みで感謝ですが、与えられた「日毎の糧」に感謝してささげ物をするのも感謝で、恵みなのです。エルサレム教会は、マケドニアやコリントの教会から献金をもらって勿論神に感謝するでしょうが、献金した教会の側もまた、献金できて心から感謝します。彼らからは実際に現実に財産、金銭が失われたのですが、それでも悲しむことなく、嘆くことなく、むしろ喜びが満ち溢れて、感謝が溢れました。

こうして、もらった方も感謝し、与えた方も感謝して、神への感謝が満ちあふれるようになるのです。与えなければ誰も喜びません。相手も喜ばないし、自分も喜ばないし、神も喜ばれません。つまり誰も喜ばないのです。でも施せば、みんなが喜びます。まずもらった相手が喜び、施した自分も喜び、それをご覧になっている神も喜びます。

こよなく神に愛されている兄弟姉妹が、生かされている喜びと感謝をもって献金し、世に大きな喜びを豊かにもたらして神の栄光をあらわされるよう主の御名により祈ります。